

1.6 固有値・固有ベクトルと対角化

例から始めよう。 $A = \begin{pmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & 2 \end{pmatrix}$ とする。 $P = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & 0 \\ 1 & 0 & -1 \end{pmatrix}$ とすると $P^{-1} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -2 & 1 \\ 1 & 1 & -2 \end{pmatrix}$

なので

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 4 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

となる。

対角成分以外が 0 であるような行列を対角行列と呼び、行列 A に対し $P^{-1}AP$ が対角行列になるような P を求め、実際に $P^{-1}AP$ を求める事を対角化という。

対角化には色々な応用がある。ここではべき乗の計算のみを取り上げる。 A の n 乗を計算してみよう。 $B = P^{-1}AP$ とおくと、 $B^2 = (P^{-1}AP)(P^{-1}AP) = P^{-1}A(PP^{-1})AP = P^{-1}A^2P$ となる。以下同様にして $B^n = P^{-1}A^nP$ を得る。 B は対角行列なので

$$B^n = \begin{pmatrix} 4^n & 0 & 0 \\ 0 & 1^n & 0 \\ 0 & 0 & 1^n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 4^n & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

を得る。よって

$$A^n = PB^nP^{-1} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & 0 \\ 1 & 0 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 4^n & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -2 & 1 \\ 1 & 1 & -2 \end{pmatrix} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 4^n + 2 & 4^n - 1 & 4^n - 1 \\ 4^n - 1 & 4^n + 2 & 4^n - 1 \\ 4^n - 1 & 4^n - 1 & 4^n + 2 \end{pmatrix}$$

が分かる。

この例では P は天下りに与えられた。逆にもしこの様な P が存在したとする。 $P = (\mathbf{a} \ \mathbf{b} \ \mathbf{c})$ とす

ると、 $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 4 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$ より、 $AP = P \begin{pmatrix} 4 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$ を得る。このとき $(A\mathbf{a} \ A\mathbf{b} \ A\mathbf{c}) =$

$A(\mathbf{a} \ \mathbf{b} \ \mathbf{c}) = (\mathbf{a} \ \mathbf{b} \ \mathbf{c}) \begin{pmatrix} 4 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} = (4\mathbf{a} \ \mathbf{b} \ \mathbf{c})$ より $A\mathbf{a} = 4\mathbf{a}$, $A\mathbf{b} = \mathbf{b}$, $A\mathbf{c} = \mathbf{c}$ が得られる。逆に

この様な \mathbf{a} , \mathbf{b} , \mathbf{c} で 1 次独立なものが見つければ、この変形を逆にたどり P が見つかる。変形のためには次の命題を必要とする。

命題 1.30 x , y , z が 1 次独立である事は $P = (x \ y \ z)$ が逆行列を持つ事の必要十分条件である。

証明 P が逆行列を持つとする。 $a\mathbf{x} + b\mathbf{y} + c\mathbf{z} = \mathbf{0}$ が成立しているとする。この式を行列とベクトルの積の形で書くと $(\mathbf{x} \ \mathbf{y} \ \mathbf{z}) \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} = \mathbf{0}$ 。この式の左から P^{-1} をかけると $\begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} = \mathbf{0}$ を得る。

逆に $\mathbf{x}, \mathbf{y}, \mathbf{z}$ が 1 次独立とする。4 個以上のベクトルは 1 次独立でないの $\mathbf{x}, \mathbf{y}, \mathbf{z}$ は \mathbf{R}^3 の基底となる。任意のベクトルを線型結合で表示できるので、 $\mathbf{e}_1 = a_{11}\mathbf{x} + a_{21}\mathbf{y} + a_{31}\mathbf{z}$ となる実数 a_{11}, a_{21}, a_{31} が存在する。同様に $\mathbf{e}_2 = a_{12}\mathbf{x} + a_{22}\mathbf{y} + a_{32}\mathbf{z}$ $\mathbf{e}_3 = a_{13}\mathbf{x} + a_{23}\mathbf{y} + a_{33}\mathbf{z}$ なる実数が存在する。このとき $Q = (a_{ij})$ が P の逆行列を与える。

定義 1.31 行列 A に対し、スカラー λ と $\mathbf{0}$ でないベクトル \mathbf{x} が存在して、 $A\mathbf{x} = \lambda\mathbf{x}$ となる時、 λ を A の固有値 (eigenvalue) と言い、 \mathbf{x} を (λ に属する) A の固有ベクトル (eigenvector) と言う。

$$W(\lambda) = \{\mathbf{x} \in \mathbf{R}^3 \mid A\mathbf{x} = \lambda\mathbf{x}\}$$

を λ に属する A の固有 (ベクトル) 空間と言う。

$\Phi(t; A) = \det(tE_n - A)$ を A の固有多項式といい、方程式、 $\Phi(t; A) = 0$ を A の固有方程式と言う。また、この方程式の解を特性解をいう。

命題 1.32 固有方程式 $\Phi(t; A) = 0$ の実数解は A の固有値である。逆に固有値は固有方程式の実数解である。

この命題は次の補題からすぐ出てくる。

補題 1.33 $\det(B) = 0$ という事はあるゼロでないベクトル \mathbf{x} が存在して $B\mathbf{x} = \mathbf{0}$ となることの必要十分条件である。

証明 (1)(\Leftarrow) 対偶を示す。 $\det(B) \neq 0$ の時定理 1.29 より逆行列が存在するので $B\mathbf{x} = \mathbf{0}$ の左から B^{-1} をかけると $\mathbf{x} = B^{-1}B\mathbf{x} = B^{-1}\mathbf{0} = \mathbf{0}$ 、よって O.K.

(2)(\Rightarrow) $B = (\mathbf{a} \ \mathbf{b} \ \mathbf{c})$ とおく。命題 1.30 より $\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}$ は 1 次独立ではない。よってすべては 0 ではない実数 x, y, z が存在して $x\mathbf{a} + y\mathbf{b} + z\mathbf{c} = \mathbf{0}$ となる。 $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とおき、これを行列の形に直

すと $B\mathbf{x} = \mathbf{0}$ が得られる。 ■

命題 1.32 は $B = tE_n - A$ とおけばでてくる。

演習問題 1.23 次の行列の固有値・固有ベクトルを求めよ。

$$(1) \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \qquad (2) \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 1 & 2 \\ 3 & 2 & 1 \end{pmatrix}$$

$$(3) \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

命題 1.34 n 次行列 A が対角化可能である必要十分条件は n 個の 1 次独立な固有ベクトル $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3$ が存在する事である。この時、 $P = (\mathbf{u}_1 \ \mathbf{u}_2 \ \mathbf{u}_3)$ とおき、 $A\mathbf{u}_i = \lambda_i\mathbf{u}_i$ ($i = 1, 2, 3$) とすると、

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & 0 \\ 0 & \lambda_2 & 0 \\ 0 & 0 & \lambda_3 \end{pmatrix} \text{ が成立する。}$$

証明

$$AP = A(\mathbf{u}_1 \ \mathbf{u}_2 \ \mathbf{u}_3) = (A\mathbf{u}_1 \ A\mathbf{u}_2 \ A\mathbf{u}_3) = (\lambda_1\mathbf{u}_1 \ \lambda_2\mathbf{u}_2 \ \lambda_3\mathbf{u}_3) = (\mathbf{u}_1 \ \mathbf{u}_2 \ \mathbf{u}_3) \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & 0 \\ 0 & \lambda_2 & 0 \\ 0 & 0 & \lambda_3 \end{pmatrix}$$

が成立する。命題 1.30 より逆行列 P が存在するので O.K. ■

演習問題 1.24 次の行列を対角化せよ。

$$(1) \begin{pmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & 2 \end{pmatrix}$$

$$(2) \begin{pmatrix} 0 & -2 & -1 \\ 1 & 3 & 1 \\ 2 & 2 & 3 \end{pmatrix}$$

$$(3) \begin{pmatrix} -1 & -2 & -1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 2 & 2 & 2 \end{pmatrix}$$